



さつきから、ヒカリはほうきをもって、なんども窓の雪をおとしに外にでました。けれども、どんなにおとしても、雪はすぐに入ばりついて、部屋にもとるころには、もう、窓は白いペールにつつまれているのでした。

ヒカリの家は、バスの停留所の前のパンやでした。バスの停留所といっても、町はずれでしたから、めったに人のりおりのないさびしいところでした。

と、ついでに、停留所の丸いかんばんについた雪もきれいにはらいました。そうでない、バスにのる人がこまるからです。そうでない、そこに、ユキオバケがたっているようで、こわいからです。

お父さんとお母さんは、おじいさんのおみまいにいったきりです。

お店にはかぎをかけて、お部屋でまっついでない、といわれました。でも、一人でいるにはあまりにさびしくて、また、お店に電気をつけておけば、だれかがくるかもしれない、ヒカリは、お店のかぎをあけて、電気をあかあかとして、お父さんたちのかえりをまっついでました。

外はうすぐらくなってきた、雪はひどくなるいっぽうでした。だれかがカタカタと窓をたたいているようで、はじめてのおるすばんは、とてもさびしく、たよりないものでした。

なんどめかに外にでたとき、ヒカリはびっくりしました。頭のとっぺんから足のさきまでまっ白な、ユキオバケがたっていたからです。ヒカリがおど

ろいていると、ユキオバケは、

「海にいくバスはこれでいいのかい」と、いいました。よくみると、雪まみれになった、白いコートをきたおじいさんでした。

たしかに、海にいくバスはこれでいいのですが、一日に四本しかありません。それもさつきいってしまっ、あと、二時間はまたなければなりません。「バスがくるまで、ストーブにおあたりになさい」

ヒカリは大人みたいにそういって、おじいさんの手をひっぱりました。おじいさんはちよつとこまった顔をして、窓越しに家の中をのぞきこみました。

「いいよ。えんりよしくなくていいの。こないなかの、とくにこんなぶぶぶきの日には、だれがきてもうれしいのです。」

それに、おじいさんの手ぶくるも「トも、こおったようにつめたくて、早くおじいさんをあたたためてあげなくてはなりません。」

おじいさんは、パタパタと音をたて



て服についた雪をはらうと、帽子をとってドアをあけました。どこかで見たことのある、なつかしい顔でしたが、ヒカリにとって、いまはそれどころではありません。

「おうちの人はいないの?」

「いまは、いないの」

パンのケースの中にはまだいっぱいパンがはいっています。こんなへんぴなところで、そんなにたくさんパンがうれるともおもわれません。

おじいさんはさいふをだすと、

「いちばんおいしいパンをひとつくれるかな」

と、いいました。

ヒカリはチョコレートのかかったパンをケースからだしておじいさんにわたしました。それがいちばんすきなパンなのです。

「いくらかな」

けれども、ヒカリはまだ字がよめません。だまっていると、おじいさんはパンの前にかいてある値段をみて、ヒカリに百円をわたしました。

「はやくストーブにあたってください」

ヒカリはじぶんよりの小さないすをストーブの前において、おじいさんの手をひっぱりました。おじいさんはそ

「よしをぬると、手ぶくろをとって、ストーブに手をかざしました。」「うちのおいしいパンをたべてください」

おじいさんは、ヒカ리를みてわらうと、チョコレートパンをたべました。家の中はしずまりかえっています。ストーブの中でもえる火の音と、窓をたたくふぶきの音がいはい、なにもきこえません。

「うちの人は、どこにいったの」「町にいったの」
ヒカりはきゆうにさびしくなりました。そして、自分もチョコレートパン

をもってくると、おじいさんのよこべたんとすわってたべはじめました。」「おじいさんはどこからきたの?」

おじいさんはパンをたべるのをやめて、
「これから海にいくんだよ」と、いいました。

「町からきたの?」
「そうだよ。むかし、ここへきたことがあるんだよ」

「ここへきたことがあるのね」
ヒカりはまんそくそうにうなづく
と、パンをすっかりたいらげました。
おじいさんはポケットからハンカチを



おじいさんがなくなつたので、いまからむかえにくるといいました。

そのとき、バスの音がきこえました。ドアをあけてみると、みたことのない白いバスがとまっています。中には、ユキオバケみたいに、白いふくをきた人たちがのっています。おじいさんもやってきて、ヒカリのうしろから、バスをみました。

「いかなくちや」
おじいさんはゆっくりとぼうしをかぶり、白いコートを着て外へでました。ヒカリはおじいさんのあとをおいまして。

「まだいかなくていいのよ。あれはち

がうバスだから」

ヒカリは、必死になって、おじいさんのコートをひっぱりました。

運転手さんが、窓から顔をだして、
「これがさいこのバスです。のりますか」
と、いいました。

「おじいさん、のっちゃいけないの」
ヒカリはおじいさんにしがみつきました。

おじいさんはヒカ리를だきあげて、なんども、ほおずりをしました。それから、おじいさんはヒカリをおろすと、ヒカリのほったをやさしくなでてから、バスにのりました。ドア

だと、
「みてごらん」と、いいました。

おじいさんは、ハンカチをうらにおもてにと「フ」フ「フ」がして、そこになにもないことをみせると、
「はいっ」

と、さげんで、ハンカチの下から、小さなオルゴールをとりだしました。茶色の木箱の上に「エロ」がのっていて、おじいさんが「エロ」の赤いはなをおすと、音楽をかなでながらクルクルとまわりだしました。それをみると、ヒカリは今までのさびしさをすっかりわすれてしまいました。

おじいさんは、店のおくにオルガンをみつけると、そこへあるいて行って、「エロ」のオルゴールにあわせて、オルガンをひきはじめました。そう、それは、いつもお父さんがひいてくれる曲でした。

ヒカリが、オルゴールをもって、おじいさんのところへいこうとしたとき、電話のベルがなりました。電話はお父さんからでした。

は音もなくしまつて、バスは走りだしました。そして、手をふっているおじいさんのすがたは、バスとともにふぶきにのまれて、みえなくなっていました。

バスといれちがいに、お父さんがむかえにきました。お父さんは、雪の中でひとりでないているヒカ리를みて、たいそうおどろきました。
「どうしたの」

ヒカリはお父さんの手をひっぱって家の中にはいると、おじいさんがくれたオルゴールをみせました。「エロ」の赤いはなをおすと、オルゴールがなりだしました。

お父さんはヒカ리를だきあげると、オルゴールにあわせて歌いだしました。

「おじいさんがきたの」
と、ヒカリがいうと、お父さんはもつと大きな声で歌いました。ヒカリはお父さんの首にしがみついて、グリグリと頭をこすりつけました。

おわり